ヒロシマ ユネスコ

被爆・終戦70年

特別号

平和へ～
「私が伝えたいこと、遺したいこと」

はじめに

被爆・終戦７０年を迎えた今年、被爆者や戦争体験者の高齢化と相まって次代に向けた体験の継承が、切実かつ喫緊の課題です。

「だからこそ今、体験を書き遺し、後世の若者に語り伝えよう」と、当協会では会員を中心に被爆・終戦７０年、「平和へ～私が伝えたいこと、遺したいこと」とのタイトルで、被爆・終戦・復興にちなんだ手記を、機関紙特別号として発行しました。

体験アピールの一文字一文字から、被爆者や戦争犠牲者を二度と出してはならないという、世界平和への叫びがにじんでいます。復興、再建に向け手を携えて共に生きようとする人間の固い絆が綴られ書き込まれています。

手記を寄せていただいた皆様に、感謝を申し上げますとともに、体験やエッセーが少しでも、非人道的な核兵器の不使用、廃絶、人類平和構築への一助になることを心から祈ってやみません。

なお、昨年の８．２０広島土砂災害を経験された曽根田さんから特別寄稿をいただきました。被災地の一日も早い復興を願っています。　　広島ユネスコ協会

執筆者一覧（五十音順：敬称略）

足立　柳子　疎開してきた子 ……②
井尾　義信　小さな平和宣言 ……③
宇野　　豪　追懐・長田　新先生 ……④
亀井　　章　《70年》～思い出し・忘れまい・明日のために～ …… ⑤
北川　建次　炎の日から70年ー核なき世界を求めてー …… ⑥
柴田　幸子　大阪で…。空襲の最中を ……⑦
世木田寛子　原爆の子の像と私 ……⑧
高橋　史繪　終戦・引き揚げ・広島 ……⑨
中山　修一　私の戦争体験＝ユネスコ＝ＥＳＤ…⑩
畑口　　實　被爆から70年ーそれは 私の人生ー ⑪
平岡　　敬　人肉食いの記憶……⑫
藤井　正一　戦後70年と私ー家族疎開 と福山空襲ー …… ⑬
藤井　孝行　長崎被爆の故永井 隆博士から贈呈されたバラ保存運動に携わって … ⑭
藤川　和康　語り継ぐ責任を感じる、２枚の被爆絵 …… ⑮
（特別寄稿）曽根田敏明　8.20広島土砂災害を体験して……⑯

編集・発行／広島ユネスコ協会(広島市中区袋町６番36号　広島市まちづくり市民交流プラザ　メールボックス89号気付・☎090－7132－2284 森木)

「疎開してきた子」

足立　柳子

「ぼくは広島へ帰りたい。どうしても帰りたい。これから戸河内本郷まで歩くんだ」。

あまりにも切実なＹ君の言葉に、もはや説得はできないと、傍にいる妹たちに絶対に言うなと口止めして、むすびを２つ作った。そして、歩いて山越えする 14 キロの道は､町の子には無理だからトラックを待てと指示した。坂道を曲がる時、必ず木炭車のスピードが落ちるから、その時を狙って飛び付くんだと、2 人で待機していた。ところが、目ざとく気付いた運転手にこっぴどく叱られ、ついに断念し、その夜は裏の物置小屋へ匿（かくま）うことにした。

夕食時、何となく落ち着かない兄妹の様子に気付いた父から咎められ、話し始めた時、「こんばんは」と疎開児引率の男先生の声が聞こえた。日暮れになっても姿の見えないＹ君は、隣の席どうし仲よくしていた M 君が知っているに違いない、と訪ねて来られたのだ。

食料不足を補うべく、近所の畑でカボチャを育てていた。暑い日、みんなで草取りに出かけた時、一人の女の子が、つるの先の方を踏ん付けたので、男先生にひどく叱られて本当にかわいそうだった。私がこっそり、つるの芯を止めたら株に近い実が大きくなるんだ、と教えたらその子がにっこり笑ってくれた。

村の子の家へ遊びに行ってもいいが、食べ物は駄目と決められていた。しかしながら、炒豆や蓬だんごを一緒に食べたときの嬉しそうな顔は、今も目の前に浮かんでくる。

昼食は、疎開の子は寮に帰り、学校に近い子も家に帰って食べるが、遠い子は弁当を持って来ていた。ある時、その子の弁当がなくなり、大探ししたら下駄箱の裏にあったというような事件もあった。

夏休みになった頃、寮でチフスが発生し、子ども５~６人と女先生が本郷の病院へ入院され､まもなく女先生が亡くなられたと聞いた。お気の毒なことと手を合わせたものだ。

1945 年（昭和 20 年）４月、松原国民学校５年生だった仲間に、当時の様子を尋ねてみたものの、人数が増えて楽しい事もあったはずなのに、全くそれが出てこない。これまでずっと複式学級だったのが､単級で勉強できると聞いて、教室が畳敷の作法室の裁法机であっても妙に新鮮で嬉しかったのが印象に残っている。

竹屋小学校百周年記念誌の集団疎開の記録で、山県郡（安野、加計、殿賀、筒賀、戸河内の各町村）へ約３００人、うち戸河内町１３０人の中、松原国民学校へは約４０人が疎開したことが判明した｡松原校は３~５年生で６年生はいなかった。同誌によると冒頭の脱走事件は他地区でもあったようだ。

松原で８月初めに発生した集団チフスの原因は、面会に来た保護者の持って来たビワの実らしいこと。入院児童は６人、女先生は若く師範学校を出たての方だった。先生の父親が見舞いに来られ、医療品を買いに帰ったその日に被爆死。その事実を知らず父の来るのが遅いと恨みながら､8 月 11 日に死んでいったと記されている。６人の児童は回復したが、３年男子が腸捻転を起こして死亡。医師の手当ても効なく。父の来るのも間に合わず苦悶のうちにーと。

本文のまとめに当たり、「記憶は記録」を再確認した。そして「集団疎開」の故に味わった子どもたちや家族のつらさや悲しみ、淋しさや苦しみ、失われた尊い命。数しれない多くの不幸を招く「戦争」は、二度と決して起こしてはならないと強く思う。

『小さな平和宣言』

井尾　義信

８月６日、広島市平和記念公園、平和祈念式典。８時１５分、鐘を合図に黙祷。そして広島市長の平和宣言。そのあとこども代表による「平和への誓い」。澄んだこどもの声が会場に響き渡る。

「平和への誓い」も始まって今年で21回を数え、すっかり式典に定着した。年を追って反響は広がり、全国の小学生から「どのようにしたら代表になれるのか」などの問い合わせが市教委に届くという。

今年も、広島市内の小学校６年生１万９４０人から平和への想いを綴った作文が寄せられた。そして事前の審査で選ばれた２０人が、去る６月１３日、南区民文化センターで開かれた「こどもピースサミット」で、それぞれ力強く発表。厳しい審査の結果、大賞２人が決まった。白島小学校の桑原悠露君と矢野南小学校の細川友花さん。この２人が、今年の「平和への誓い」のこども代表である。

このあと６月末に、発表した２０人が集まり話し合いながら「誓い」の文案をまとめる。

実は、私は１８年前から市教委の依頼で「誓い」の朗読発表のアドバイザーを務めている。７月下旬、市教委の会議室で代表２人に会い発表を聴く。特に緊張した様子もなく、落ち着いて話しはじめる。

ことばの意味や発声、朗読のスピード、間、抑揚、そして男女ふたりで交互に発表するときの心遣いなどについて指導しながら、練習を繰り返す。

この間、私にとっては、孫のようなこどもたちとの熱い時間が過ぎる。

練習の前と後では、手前みそではあるが、素晴らしい「誓い」に変身する。あとは、当日、あの平和公園の式典の大舞台に、いつも通りの自然体で臨むだけである。こどもたちは、これまで２０年間、期待通りに見事に平和へのメッセージを発表し続けてきた。

「誓い」の内容も、年とともに変化してきたが、最近では、被爆体験者である自分の曾祖父母、祖父母から聴いた話を具体的に取り入れたり、地球上で続く戦争、紛争を憂うなかで、「平和の大切さを伝えるのが、私たちの役目です」と声を大にして訴える。

ヒロシマのこどもたちのこの「小さな平和宣言」が、近い将来、大きく実を結ぶことを祈るのみである。

桑原君と細川さんの出番は間もなくだ。

追懐・長田 新先生

宇野　　豪

広島にユネスコ運動の兆しが見え始めたのは、1947 年（昭和 22 年）頃であった。この年の 12 月に、中国新聞などの呼びかけによって「ユネスコ協力会準備会」が発足し、その 2 年後、49 年（同 24 年）11 月に「広島ユネスコ協力会発会式」が行われている。そして、広島文理科大学長退任後の長田　新先生がこの協力会の会長に就任された。

周知のように、長田先生はペスタロッチー研究で知られる著名な教育学者であったが、同時に強い平和主義者であり、とりわけ原爆使用の非人道性に関しては、その訴えは並々ならぬものがあった。それは恐らく先生自身の被爆体験と無関係ではあるまい。先生は、あの原爆の投下で重傷を負い、原爆症のため 11 月頃まで起き上がることが出来なかったのである。

長田　新先生

先生の平和への願いと原爆の残虐性に対する想いは、やがて 51 年（同 26 年）に、岩波書店から発行された長田　新編「原爆の子～広島の少年少女のうったえ～」となって表明された。

この書は、先生の発案と多くの協力者によって生まれたものである。

その「序」の中で、先生は次のように書かれている。「私は一人の教育学者として、このあまりにも悲劇的な体験をもっている少年・少女たち、まだ特定のイデオロギーや宗教的世界観や政治思想などによって染められていない無垢な少年・少女たちの手記を集めて、今日世界の教育にとって最も重要な課題の一つである『平和のための教育』研究の資料として、これを整理し、かつ人類文化史上における不朽の記念碑（ドキュメント）として、これを永久に遺したいと思い立った」。

長田先生は、61 年(同 36 年) 4 月に 74 歳で逝去されたが、先生の遺された偉業と教訓はいまも消えることなく、単に文字としてのみではなく、我々の胸のなかに受け継がれているのである。

（追記）　長田先生は、87 年（明治 20 年）長野県諏訪郡豊平村に生まれ、06 年 (同 39 年) 広島高等師範学校に入学。卒業後、京都帝大哲学科に入学。卒業後、19 年（大正 8 年）に母校広島高師の講師、翌年教授に就任。この頃から同志とともにペスタロッチー運動を始め、28 年（昭和 3 年）にドイツに留学。翌年広島文理科大学助教授に就任。45 年（昭和 20 年）文理科大学長、兼高等師範学校長に就任。49 年（同 24 年）教授に転じ、53 年（同 28 年）定年により名誉教授となられた。そして、前述のように広島ユネスコ協力会の会長として運動に携わられたのである。

広島のわれわれ学生がユネスコ活動を始めたのも協力会と殆ど同時であった。49 年（同 24 年) 12 月に「広島学生ユネスコ・クラブ発会式」を広島文理大において挙行した。そのとき、協力会長・長田先生の「ユネスコ運動の本質と使命」というご講演を拝聴した。

また、翌 50 年（同 25 年）8 月に広島で、第５回ユネスコ運動全国大会が開催され、同時に、第 4 回全国学生ユネスコ協議会が開催されることになり、全国の関係者が集まり、われわれ学生代表も参加して撮った写真、その最前列の椅子席に仁科芳雄博士や安倍能成氏等とともに見える長田先生、懐かしい限りである。(ただし、この全国大会は、たまたま朝鮮半島で始まった動乱の影響で中止となった）。

《７０年》～思い出し・忘れまい・明日のために～

亀井　　章

70 年を迎えて反芻する言葉がある。「過去に眼を閉ざす者は現在にも盲目になる」(独元大統領ワイツゼッカー)。

「かき船移転問題」発生の時もそうだった。「70 年は遠くになりにけり」か。アメリカの原子爆弾が地獄絵を現出し、阿鼻叫喚のルツボと化した川面に、酒宴と嬌声で賑わう料亭？　平和公園に向かう観光客を広島伝統産業カキの食文化でおもてなし？　急増する海外からの旅行客のお目当てはヒロシマ観光にあらず？

――あれから 70 年。世界史時計からすれば、70 年の歳月は１秒にも満たない。70 年前の出来事、千年も何千年も未来にまで語り継がれるだろう人類史上初の核兵器使用の歴史的な出来事を、追憶する＜所縁・拠り所＞の場が、カキ消されようとしている。70 年のこの年にー。

戦争が終わってから 70 年。過去に眼を閉じられない。

「宇品」「軍事郵便」の文字が印刷された葉書を家族に送り続けた父は、陸軍軍属兵士として宇品港から中国に渡り、1937 年 11 月の南京大虐殺事件の時、父は兵站部（20 余年前、厚生省問合せた）配属だから手を血で染めなかった（と思う。同年同月、私は生まれた）。やがて輸送船暁丸で南方へ。1944 年ニューギニアで戦死。兵站への補給は絶たれ、南方の戦死者の６割は餓死というから、恐らく被弾による散華ではない“不名誉”な死を、食に餓え、肉親愛に餓えたまま 42 歳で迎えたに違いない。戦後４年を経て白木の箱に収まった紙切れ１枚の姿で、両陛下のご真影が未だ神棚に飾られていた故郷の家に帰還した。

第二次世界大戦・太平洋戦争で日本人は 310 万人が死亡、軍人は戦死 230 万人、112 万柱が未帰国。アジア人の死者は 2000 万人と言う。因みに第二次世界大戦の全死者は 6500 万人で、第一次大戦の 1300 万人の５倍増は、大量殺戮兵器の出現がもたらした。その極みが原爆であり、ナチのユダヤ人虐殺である。

――戦争が終わって 70 年。第９条を柱に戦争放棄を掲げた平和憲法のもと 70 年間は戦争をしない・させない日本で来たのに、今、戦雲の気配が漂ってきた。安保法制という名の戦争法制が国会で審議されている。

また、「70 年」は、私たち民間運動の源流であるユネスコの誕生に関わる特筆すべき年である。

1945 年 11 月、ロンドンで UNESCO（国連教育科学文化機関）が創立された。当初、UNECO の名称で検討されていた機関名（UNESCO）は、創立準備段階で、8 月の日本（広島）への原爆投下などを想起した科学者が Science（科学）の「S」の追加を提案したことに因る（「民間ユネスコ運動 60 年史」)。ここにもヒロシマの影が宿る。

11 月 1 日に始まった設立総会最終日の 16 日、ユネスコ憲章が採択された。「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和の砦を築かねばならない」の憲章前文を私たちは機会ある度に口誦し、これを広島ユネスコ協会、広島県ユネスコ連協、日本ユネスコ協会連盟、各地ユ協の専用封筒に刷り、ユネスコの理念の普及に努めている。

「人の心」と「平和の砦」。この言葉に焦がれる思いを、大戦の戦火が消えて間もないユネスコ創立総会は、託したに違いない。あれから 70 年。時移り、昨今の内外の情勢は、言葉の置き換えを迫られる気がしてならない。「人の心」を「為政者の心」に、「平和の砦」は「戦争予防・防止」に――。

70 年。帰りなん、いざ！　ユネスコ憲章と日本国憲法へ。

■追記：

本稿は提出期限日の６月 15 日以前に執筆した。その１か月後、国会で安保法制案が、７月 15 日の衆議院特別委員会で、同 16 日の本会議で採決された。戦後 70 年の節目に戦争放棄をうたった憲法が安倍政権によって踏みにじられようとしている。幸い本誌の寄稿者に校正ゲラが届けられたのを機に、追記によって本稿の舌足らずを補わせてもらいつつ、他の原稿も執筆と発行日までの、やむを得ない“タイムラグ”へのご理解をー。

「炎の日から７０年　ー核なき世界を求めてー」

北川　建次

今年、2015 年（平成 27 年）は、人類最初の恐ろしい被爆と、近代日本の邪（よこしま）な方向へ外れた敗戦の時から 70 年に当たる。

あの恐ろしい忌まわしい年から 70 年も経ってしまった。時の流れは早いものである。それにしても、日清、日露、第一次世界大戦、太平洋戦争と、近代日本は次から次へと戦争ばかり、50 年経った。何もかも目茶苦茶になって、1945 年（昭和 20 年）8 月 15 日を迎えたのである。

廃墟の中で１億人は深い反省と、二度と戦争をしてはいけないとの悔悟の念に燃えたはずである。戦後 70 年間は、確かに平和を守って来た。この事はすごい事である。

敗戦の念も覚めやらぬ 1950 年（昭和 25 年）に朝鮮動乱が起こった。日本は占領下にあったが、朝鮮戦争には加わらなかった。

更にベトナム戦争があり、イラクの動乱があった。アフガニスタンへのソ連の侵攻、内乱、シリア、イスラエル、アラブの戦乱、いずれも日本は新憲法を楯に、できるだけ戦乱に巻き込まれないようにしていた。

このような戦後の平和を守る努力は、もっと高く評価されてしかるべきである。このような平和を守る努力と、戦後の復興への努力が、日本を世界第 2 位か第３位の経済大国へと発展させた淵源である。

戦後の不戦の誓いは、これからも永遠に守って行くことが肝要である。この事が日本をして、世界の人々の尊敬の念を集め、世界の平和と安寧への貢献となるであろう。

みだりに不戦の条項を変えるべきではない。これは、ユネスコの基本的精神でもある。

一方でヒロシマは、世界で最初に、あの恐ろしい原子爆弾の投下を受け、人類史上考えられないような夥（おびただ）しい死者が出た。その数 20 万人余と言われている。

人間は歴史とともに進歩する存在であると思っていたが、この原爆の出現により、そうでなくなった。よく〝Bright and Blight〟と言われている。Bright の方の人類は、輝かしい文明を誇り、パソコン、インターネット、新幹線、航空機の発達と、果てしない物質的欲望の限りを尽くしている。しかし Blight の方はどうか。有史以来考えられないような大量虐殺を繰り返し、その極致がこの原水爆、核兵器である。

このような人道上許すべからざる大量虐殺兵器を容認する限り、人類の滅亡の日は近い。

しかも、70 億に近い世界の人々は、この核兵器の恐ろしさに気付いていない。

恐るべきことである。

ヒロシマ、ナガサキ、日本の人々は、核の恐ろしさ、人類を滅亡させてしまうことを、訴えて行かねばならない。人類の滅亡を防ぐために。

私も「大河の流れも水の一滴から」、「一粒の麦も死なずば」の精神で、命ある限り、核廃絶を訴えて行かねばならない。

大阪で…。空襲の最中を…

柴田　幸子

女学生になった喜びもつかの間、戦局は日増しに厳しくなり、昭和 19 年、「国民総動員令が出された。

上級生たちは次々と軍需工場へ動員されていき、学校には私たち１年生だけが残った。そして学校を守るための、防火訓練、防護訓練などの毎日だった。

19 年６月、初めて北九州が本土空襲を受け、20 年３月までに延べ 102 都市が、そして特に、３月 10 日の東京大空襲では無差別爆撃で、一夜に 10 万人以上の都民が犠牲となったといわれている。また６月だけで 107 回以上昼夜を問わず、Ｂ29 爆撃機が日本の空を覆い、56 都市以上が空襲され、ほとんどすべての県庁所在地が、焦土となっていった。

初期の空襲は軍需工場や飛行場など、特定施設を狙った精密爆撃だったが、日本の家屋が木造であることに目を付け、研究され尽くしたうえ投下されたのが、油脂焼夷弾であった。爆弾は“爆薬”の爆発力を用いるが、焼夷弾は激しい火災を起こすことを目的としているもので、“爆薬”ではなく油脂やテルミットと呼ばれる“発火”を生じさせる物質が詰め込まれていて、一つの“爆弾”ように見えるが、内部には多数の焼夷弾が子弾として入っている。投下されると「ザァーー」という、なんとも言えない不気味な“音”を立てながら、途中でバラバラになり「花火」のように四方八方に広がりながら落ちてくる。そして辺り一面あっという間に火の海になってしまうのである。

２年生になった５月、とうとう私たちにも学徒動員令が下り、森下仁丹へ行くことになった。６月になって空襲はだんだん激しさを加え、毎晩の様に空襲警報が出され着の身着のままで、防空頭巾をかぶり、父が庭に掘った畳一枚ぐらいの防空壕へ。空襲解除になって壕から出ると、大阪の空はいつも焼夷弾による火災でぼわーと赤くなっていた。私の一家はその頃、大阪市に隣接する守口市に住んでいて、動員先の森下仁丹は大阪市内の森ノ宮兵器工廠の近くにあった。

その日も朝、工場に着いて間もなく警戒警報になった。まだ子どもだった私たちを、危険な場所においてはという、工場側の配慮からか、低学年の私たちは家に帰ることになった。

森ノ宮駅から京橋まで（現大阪環状線）に乗り、京阪電車に乗り換え守口まで帰るのであるが、京橋に着いた時にはもう空襲警報に、そして頭の上にはＢ29 爆撃機が・・・「早く！防空壕へ」という先生の声に、私たちは慌てて駅の下の待避所に防空頭巾の頭を抱えて小さくなっていると“ザァザァーザァー”という音、顔を上げてふと見ると、まるで花火のように何かが落ちてくる。焼夷弾であった。と見る見るうちに周りに散らばっていく。そして疎開あとの木片に火が付き、燃え広がっていき、そして私たちが乗ってきた省線電車も火だるまになっている。「もし、あれに乗っていたら・・」と思うとぞっとした。「ここにいたら危ない！」という先生の声。とにかくここから早く逃げ出して安全なところへ、そして早く家へ帰りたいと、無我夢中で走り出した。“キーン、バリバリ”低空で機銃掃射である。航空母艦から飛び立った戦闘機グラマンで、白いものや少しでも動くものを見つけると、忽ち狙い撃ちにされる。軒下に身を潜めては夢中で走り、どこをどう走ったのか気がつくと麦畑の中に伏せていた。麦畑の中を這うようにしているうちに、どの位時間がたったのか、ようやく空襲は終わった。

ホッとして周りを見まわすと、大勢いたはずの友だちはどこでどう外れたのか、わずかの人数になっていた。そして空襲の後、いつも煙で空は真っ黒になり、灰色の雨が降り出し、焼けちぎれた紙のきれ端が落ちてくる。私は緊張の連続とあまりの恐ろしさに茫然として、どこをどう歩いて帰ったのか憶えていないが、ともかくも家に辿り着いた。それから半月後、森下仁丹が再度の空襲で焼け、工場長も直撃弾を受けて、亡くなられた。私たちは行くところもなく、自宅待機となり、そして終戦となったのである。

“個人の幸せと生きる権利を奪ってしまう戦争を絶対に許してはならない”

資料：「後世に伝えたい空襲・艦砲射撃の惨禍」、「平和への想い 2010－未来へのメッセージ」（著者：社団法人日本戦災遺族会）を参考にした。

「原爆の子の像」と私

世木田　寛子

今日も広島ユネスコ協会の会が終わって、平和記念公園を通って帰路につく。原爆の子の像には、各地から届けられた千羽鶴がぎっしりと収められている。平和教育でヒロシマを学び、１羽１羽丁寧に折りあげられたものだろう。メッセージが書き添えてある。同じことをしていた自分の中学時代が思い出される。

昭和３３年５月５日、国泰寺中学校３年の私は「原爆の子の像」の除幕式に、何人かの友と参列をしていた。クスノキの新緑が眩しい下で、多くの中学校の生徒たちに見守られて式は始まった。

「これは　ぼくらの叫びです

これは私たちの祈りです

世界に平和をきずくための」

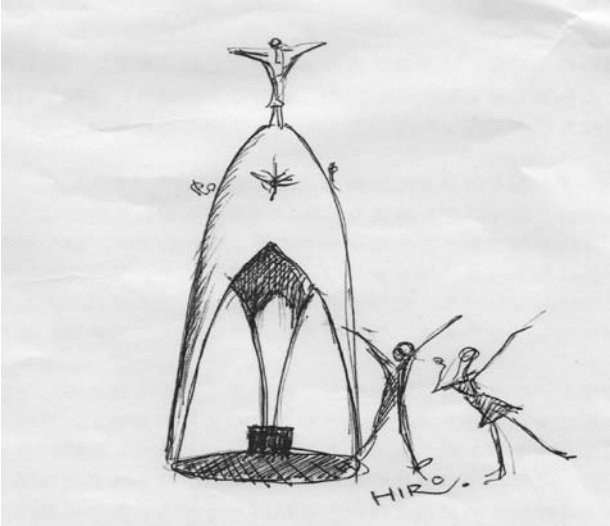
私の親友が、詠み上げた。心を込めて彼女は訴えた。すばらしい叫びだった。みんなの心をしっかりと捉えた。

それまでは、隣の中学校で、同年齢の佐々木禎子さんが、被爆し、それが元で原爆症に苦しみ死に至ったということは聞いていたが、そのことの重みについてはあまり理解していなかった。周りにも被爆で苦しむ友が沢山いたからかもしれない。

それから何年かして広島市の中学校の教師となった。

夏が近づいてくると、毎年、平和教育をした。「ひろしま」という副教材をもとに、原爆投下に至る歴史、原爆症でなくなった子供のこと、苦しむ人々、原子爆弾の脅威などについて扱う。２年生になると長崎や沖縄についての学習、そして３年生になると世界平和に関するものを盛り込んでいった。修学旅行で長崎をコースに入れたことも多かった。生徒たちが平和についてしっかり考え、行動できる力をつけることを願いながら。

教師の職を退き、被爆７０年を迎えるにあたり、改めて広島の生徒たちに平和に関してどのくらいの意識を持たせることが出来ただろうかと思うことが多い。同じように被爆し、家を焼かれ、風評、差別を目の当たりにした私。今でもこの広島で生かされている。そこにはいくつかの使命があるはずだ。広島ユネスコ協会の一員としてそれを模索し、行動に移すことに力を注がなければ・・・と、改めて思う今日である。



「終戦・引き揚げ・広島」

高橋　史繪

今年は戦後 70 年。国民学校３年生、当時８歳の私の終戦前後の出来事を思い出してみた。

幼い時家族と共に韓国に移り住んだ私にとって、故郷広島の記憶はほとんど無い。

終戦のどれ位前だったろうか。校舎は軍隊の宿舎となり、私たちはお寺の本堂で空襲のサイレンに怯えながら、二部授業を受けていた。何故か体育と音楽の授業は無かったように思う。

間もなく終戦の日を迎えた私たちは、学校に集まり、若い女性教師から〝在校証明書〟を渡された。その時の教師の言葉は、今もはっきりと耳の奥に残っている。「これを失くしたら、日本に帰っても学校へ行けなくなります。大切に持って帰ってください」。

日本へ帰る┆それは今の生活が無くなることだ。不安を感じながら級友たちと最後の別れをしたのである。

家では庭の防空壕の横に両親と姉が大きな穴を掘り、そこで座敷にあった教育勅語や、教材など全部焼いた。当時５年生だった姉は、泣きながら教科書をひとつずつ炎の中に入れていたが、私はただぼんやりと、これからどうなるのだろうと思いながら、煙の行方を追っていた。両親は引き揚げの準備に忙しい毎日だった。特に母は、広島は原爆で何も無くなったと聞いていたので、最小限必要な物をリュックに何度も詰め替えていた。危険が伴う引き揚げの長旅に耐えられるように、子どもたち４人の服を仕立ててくれたが、いつの間にあれだけの事が出来たのだろうと不思議に思う。

夏の終わり、私たち一家６人は住み慣れたテジョンをあとにして、プサンに向かった。

列車やトロッコを乗り継いで、やっとのことでプサンに着いた私たちは、一足先に帰国した親戚の家で、引き揚げ船を待つことになった。10 月の終わり、朝、まだ暗いうちにプサンの港へ行き、一日中並んで待ったが、その日は乗船出来ず、次の日もう一度出直すことになったのである。再び早朝から並び夜遅くになって、ようやくアメリカの憲兵たちによる荷物検査を受けることになった。トランクの中に入っていた数々の写真の中から、いとこの見合い写真を見つけた若い憲兵たち、着物姿が珍しかったのか、数人で陽気に騒ぎ出し、そのうち姉に名前や年齢を尋ねるなど、何とも和やかな雰囲気となったのである。ハサミですら凶器であると取り上げられていたのに、ろくに中も調べず笑顔で、オーケーと通してくれたのは幸運だったのだろう。

玄界灘を揺れに揺れて博多港に着いた時、全員頭からＤＤＴをかけられた事は忘れられない。

次の日の夜、門司駅でやっと乗れた列車の最後尾の車両に、弟と妹を押し込んだものの、私が乗るのが精一杯。父に言われるままに、線路の上で両手を拡げている父にまず弟を、次に母の両腕に妹を投げ落とし、最後に私も飛び降りて父に受け止めてもらった

もし、その前に列車が発車していたら、幼い妹と弟を連れて私はどうしただろうか・・。呑気者の私が一番緊張した出来事であった。

ようやくのことで広島駅に着いた私たちを待っていたのは、一面焼け野原の故郷広島。原爆投下から、まだ３ヵ月も経っていなかった。

家も仕事も失い、焼け野原ですべてをやり直さなければならなかった父と、苦労を共にした母、どんな思いで人生を終えたのだろうか。戦うことなく過ごしたこの 70 年を思う時、これからもこの平和を決して手放すことがあってはならないと強く思う。

☆　☆　☆

数年前、東京から遊びに来た小学４年生の女の子、日本が戦争をしたことも、広島・長崎に原爆が投下されたことも、全く知らなかった。

「ェ?　広島にも放射能があったの?」と、びっくりしたように言う少女に、こちらの方が驚く。――何も知らないのだ、教えられていない――。

私は書棚から原爆の写真集を一冊取り出して、「これを見てごらん」と差し出した。

無言で最後まで見終った彼女は、ひとこと「怖い…」とだけ言った。それから、しばらく沈黙が続いたのち、思いつめたように尋ねたのである。

「誰が戦争を始めるの?」

「どうやって終わらせるの?」

大人たちは答えねばならない。

「私の戦争体験＝ユネスコ＝ＥＳＤ」

中山　修一

私の戦争体験は、生まれ故郷の大分市にある。今から 70 年前、戦争が終わった時、私は 5 歳であった。その頃を振り返るとき、いつも「二つの喜び」と「二つの恐怖」を思い出す。

「二つの喜び」の一つは、4 歳の時、大分駅のプラットフォームで、父が乗った出征兵士を満載した列車に向かって、多くの人々が日の丸を打ち振り、“バンザーイ”を叫ぶ中、私も旗を力いっぱい振って、心から嬉しかったことである。4 歳の私に、父親の出征を大喜びさせたあの戦争が今でも憎い。二つ目の「喜び」は、「戦争が終わった」と母から聞かされたとき、空襲警報のサイレンの音で、カビ臭く暗い防空壕に逃げ込まなくて良いのだと、心の底から嬉しかったことである。

「二つの恐怖」の一つ目は、終戦の数か月前の午後、大分市街に敵の戦闘機が機銃掃射を浴びせた時であった。防空壕への避難を呼びかける市役所のサイレンの音を聞きながら、近所の友達の家から、恐ろしくて姉の後ろを泣きながら自宅に逃げ帰った。待っていた母が防空壕に入るのに間に合わないと見た私を、自分の腹の下に抱きかかえ、洋服ダンスの陰で守ってくれたことである。その時、母の腹の下で聞いた敵戦闘機（グラマン）の急降下音と市街地めがけての機銃掃射のドドドドドという鈍い音が、今なお耳に残る。この空襲で、道路を歩いていた人に機銃弾が当たり死んだと、後日、母に聞かされた。「恐怖」の二つ目は、大分市大空襲の夜、母が１歳の弟を背中におんぶし、左手に姉を、右手に私の手を引いて、近くの大分川の堤防まで、自宅から１ｋｍほどを走って逃げたことである。狭い道路の両側の住宅が焼夷弾で火の海と化した中を、必死で逃げた時の“恐怖”は、未だに悪夢としてよみがえる。この夜の焼夷弾の１発が、我が家を半壊させた。

これら私の“戦争体験”は、長い教員生活の中で、「教え子を、決して戦場に送らない」を胸に日々の授業に臨む力となった。また、1960 年代後半から参加したインドの貧しい農村調査では、基礎教育普及の重要性を嫌というほど教えられた。そして、1980 年代後半からは、ユネスコ関係の国際的な会合に出席するようになった。これらの経験が合わさって、ユネスコ精神の普及に強く惹かれるようになった。

ユネスコは、1992 年から「平和で持続可能な社会の構築」こそが、ユネスコ精神の実現に欠かせないと、世界的な教育改革に乗り出した。そして、2002 年の国連サミットで日本が提案した「持続可能な開発のための教育＝ＥＳＤ」が、国連の総意でユネスコの主導事業になった。ユネスコは、ユネスコ精神の実現に向けた具体的な推進策を、ＥＳＤに盛り込んだ。2001 年から日本ユネスコ国内委員になった私は、すぐにＥＳＤの普及に関わることになった。一連の国内外の会議に臨む中で、私はユネスコ主導で進むＥＳＤが、ユネスコ精神の普及に多様な効果を発揮できると、ますます強く感じるようになった。

今、世界秩序が激変する中、“戦争のない平和で持続可能な世界を創る”ためには、次世代を担う子ども達に、ユネスコ主導のＥＳＤの普及が欠かせない。この強い思いが、今、私のＥＳＤ推進への参画を後押ししている。

被爆から７０年　ーそれは私の人生ー

畑口　　實

1945年8月6日、父が原爆で直爆死したとき、私は母の胎内にいました。私を身ごもっていた母は4日後の10日に、父を捜しに広島駅に行きました。そこで見つけたのは、父が身に着けていた「懐中時計とベルトのバックル」です。その遺品は、現在広島平和記念資料館に展示されています。

私は幼い頃から、父が原爆で死んだことを母から聞こうともしないし、母も言おうともしませんでした。でも、10代中頃からアメリカに対する憎しみが始まりました。なぜ自分は生まれながら父がいないのか、と。

広島市に就職することになりましたが、それまで1回しか平和記念資料館には行ったことがありません。就職する直前に、被爆者健康手帳を母とともに取得しましたが、その手帳を見るのもイヤで、友人、上司、同僚等にも自分が被爆者であることは決して言いませんでしたし、一生言うつもりもありませんでした。しかし51歳の時、平和記念資料館の勤務を命ぜられ、私の過去がマスコミによって知られるところとなり、非常につらい思いをしました。

でも資料館時代では、訪れる国内外の指導者の方々に私の思いをぶっつけ、「人類と核兵器は決して共存できない」と訴え続けてきました。海外の原爆展でも、特に核保有国では、常にその思いを伝えてきました。9年間、資料館で満足な仕事をしてきたと思いますが、退職後は一切原爆・平和関係から離れる決心でした。

しかし退職時の記者会見で、マスコミから「あなたのお父さんは無残にも原爆で亡くなった。お母さんは必死でお父さんを捜したが、無残な姿の遺品を見つけられた。あなたはそれらを伝える運命のもとに生まれたのでは・・」と言われ、退職後しばらくして、少しづつ活動を始めました。広島ユネスコ協会にお世話になったのも何かのご縁だと思っています。

被爆者は高齢化し、語られる方々は年々少なく、被爆の実相を伝えて行く手段がだんだん薄れてきています。先のNPT再検討会議でも、核保有国のエゴで散々な結果に終わりました。終戦後、大きな大戦はありませんが、それ以上に、この素晴らしい地球上では、テロ活動をはじめ、民族、宗教、地域等による紛争が絶えず、拡大していく傾向にあります。

終戦・被爆70年の今こそ、ユネスコ憲章の前文の精神が生かされる時です。「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和の砦を築かねばならない」。また34年前、広島平和記念公園で雪降る中、ローマ法王ヨハネパウロⅡ世も「戦争は人間のしわざです。戦争は人間の生命の破壊です。戦争は死です・・」と叫ばれました。

私たちはこの精神をしかと受け止めながら、広島ユネスコとして、地道な活動を邁進していく必要があると思います。

人肉食いの記憶

平岡　　敬

ネーミングによって実態を覆い隠すのは、日本の権力者の常套手段である。かつては「敗戦」を「終戦」と言い、「退却」を「転進」と言い換えて、事の真相を誤魔化した。今「平和」という名のオブラートに包んで「戦争」をするための法律が出来ようとしている。

戦争とは、敵、味方を問わぬ人殺しである。その戦争を体験していない政治家たちが、自分たちは安全地帯に身を置いて、口々に勇ましいことを言っている。想像力の欠如した彼らは、過去の戦争の歴史から何も学んでいないようである。

戦後、私たちはあの悲惨な戦争を総括しないまま、米国に従属しながら経済的繁栄を追い求めてきた。それ故に、戦争の意義、本質を表す呼び名さえ、国民の間で合意できていない。太平洋戦争とか第二次世界大戦と言う人もあれば、十五年戦争、あるいは大東亜戦争と呼ぶ人もいる。

私はアジア・太平洋戦争と名付けるのが最もふさわしいと思っているが、この戦争での死者は日本側 300 万人、アジア各国で 2,000 万人といわれている。

亡くなった日本兵士の多くは餓死、病死である。補給の重要性を認識しない上層部の命令で、戦地へ送り込まれた兵士たちは、現地調達を余儀なくされ、食料などの略奪に走った。遠い異境で飢えた兵士たちは、戦友の人肉を食うような地獄の状況の中で死んでいった。戦場では人間が理性を失い、狂気の行動をとる。

現代の戦争の脅威は、国と国との戦いからテロとの戦いへと移っている。しかし戦争の形がどう変わろうと、人間が殺し合う悲劇の実態は昔も今も変わらないし、戦場での残酷非情な死を美化できるものではない。

生き残った私たちは、戦争で死んだ人たちの思いを胸に刻み、70 年前「二度と戦争はしない」と誓った。戦後日本の原点は、この平和への決意にある。その誓いが忘れられ、ここにきて簡単に破られようとしている。

右傾化した政治家たちが近隣諸国への憎悪を煽って世論を戦争へと誘導する事態、さらにマスメディアが「権力の監視役」から「権力の代弁者」になりつつある状況は、戦前の歴史の繰り返しに見える。

武力に頼るのではなく、近隣諸国との緊張を和らげ、平和な環境をつくることが、真の安全保障となる。その平和構築への努力を放棄して、ひたすら米国に追従し、何事にも責任をとろうとしない指導者の姿を、死者たちはどう思うだろうか？彼らの無念を受け止め、戦争のない世界をつくることが、現在を生きる私たちの責務である。

原発を海岸に並べた日本は戦争が出来ないし、決してしてはならない。万一、戦争になれば日本は確実に滅ぶ。

非戦の誓いである平和憲法は、沖縄、広島、長崎の犠牲や人肉を食うという悲惨な体験の上に生まれた。その事実を私たちは決して忘れてはならない。

「戦後７０年と私」－家族疎開と福山空襲－

藤井　正一

私が戦時中の厳しい生活の中で児童疎開と福山の大空襲は強く記憶に残っている。

私たちの家族は父母と子供５人（男３人、女２人）であった。父は建設会社勤務（京都）に滞在し、家族６人で私は当時福山市に住んでおり、食糧の配給制、灯火管制など戦時の厳しい生活を記憶している。

1944 年（昭和 19 年）8 月から学校単位の集団疎開が実施され，45 年の疎開児童数は約 45 万人に達した。わたし達家族は 1945 年(同 20 年)６月ごろ、私は福山市立西国民学校に入学したばかりで、母親の里、広島県府中町（現在　府中市）広谷村（約 20km）に疎開した。

母親が馬車を一台調達して必要な家財道具や寝具、衣類などを積み込んで、私達子供は幼くても、身の回りの品物をにリュックサックに出来るだけ詰めて、背負って徒歩で１日掛けて疎開した。

疎開の生活は、母の実家が親切に納屋の一部を提供してくれた。配給された食べ物や母親が持参していた着物などを米などと物々交換して、なんとか生活をしていた。

学校生活では「町の子が来た」といわれて、いじめにもあった。

同級生のなかで一部の生徒達は、かばんの中に石を入れて重くしたり、かばんを取り上げて大きな木につるしたということもあった。そうした環境の中で強い子になっていったと思っている。

福山の空襲は、45 年（同 20 年）8 月 8 日午後 10 時 25 分ごろ、1 発の照明弾が船町上空で炸裂、市街は一瞬真昼のように浮かび上がった。約 1 時間にわたって焼夷弾が投下され、市中は火の海と化し、市役所、警察、駅を含めて主な建物、学校は瞬く間に焼け落ち、国宝福山城天守閣もまた福山の悲しみを象徴するかのように崩れ落ちた。

私の祖父は大正時代、建設業をしており、市内に幾つかの土地や家屋を所有していたが、空襲で焼失してしまった。私の家は空襲を免れたことは幸運であった。育ちざかりの子供達なので経済的にゆとりがなくなり、大学進学を希望した兄、弟、妹と私はアルバイトをしながら卒業することにになった。

日本は明治時代以後、天皇を頂点として全体主義で急速に経済成長し、軍事力も拡大して、領土拡大を目指し、最終的にはアジア・太平洋戦争で無条件降伏をして、占領時６年間を含めて 55 年（同 30 年）まで精神的、物質的にきびしい国民生活を過ごしてきた。

その後、日本人の勤勉さ、良質で安い労働力、高い技術力、高い貯蓄率、輸出に有利な円安相場（固定相場制 1 ドル=360 円）、消費意欲の拡大、安価な石油、所得倍増計画、朝鮮戦争とベトナム戦争の特需などがあり、多くの好条件で、高度経済成長を果たしてＧＤＰ世界第３位までとなった。

戦争を知らない政治家達が増えてきており、日米同盟の一端として集団的自衛権を拡大して戦争の加担する国になることに深い危惧を感じている。平和憲法を持つ国として、中国、北朝鮮を含むアジアですが、安全保障政策をリードする国家になることを望んでいる。

私達は戦争中の数多くの切実な経験を次の世代に伝承していくことが責務であると思っている。ユネスコ活動は大きな役割を果たていかなければならない。

日本は平和主義の憲法の下、「戦わない国」として、子供達にこの平和で世界にも貢献できる国家を譲渡していけるように尽力する決意である。

説明資料：

1937 年(昭和 12 年)日中戦争が始まり、社会情勢の変化に伴い、1941 年（同 16 年）3 月 1 日教育制度が変更され、尋常小学校は国民学校に変わった。その目的は心身を鍛えて、国のためにすべてを捧げる忠実な国民をつくることであった。

尋常小学校　⇒　国民学校初等科（6 年）

尋常高等小学校　⇒　国民学校高等科（2 年）

教育方法

1　主知的教授を排し、心身一体として教育し、教授・訓練・養護の分離を避け、国民として統一的人格の育成を期すこと

1　儀式・学校行事の教育的意義を重んじ、これを教科と合わせて一体とし全校あげて「国民錬成の道場」たらしめようとしたこと

1　学校と家庭及び社会との連絡を緊密にして児童の教育を全うしようとしたこと

教科 5 科目－国民科・理数科・体錬科・芸能科・実業科

長崎被爆の故永井 隆博士から贈呈されたバラ保存運動に携わって

藤井　孝行

永井　隆博士を知らない人は若い人を中心に残念ながら多い。しかしながら、博士は世界的に有名で、被爆しながら被爆者に救護・医療活動などをされ、世界平和に貢献されました。

博士は戦時中、結核のＸ線検診に従事し、フイルム不足で透視による診断を続けたため、1945年(昭和20年)6月には被爆による白血病と診断され、余命３年の宣告を受けました。

45年８月９日､長崎市に原子爆弾が投下され、爆心地から 700ｍの距離にある長崎医大の診察室で博士は被爆されました。右側頭動脈切断という重傷を負いながら、布を頭に巻くのみで救護活動にあたりました。その後、救護活動をされながら、「原爆爆弾救護報告書」を執筆しました。46 年（同 21 年）１月、長崎医科大学教授に就任しましたが、同年７月に長崎駅近くで倒れ、その後、病床に伏しました。病床の中、「長崎の鐘」「この子を残して」「原子野録音」「ロザリオの鎖」など著書、長崎医学会にて、「原子病と原子医学」のテーマで研究発表されるなど、数々の平和の業績が残っております。

49 年（同 24 年）11 月「被爆地の青年が平和のために手をつなごう」と広島市で広島・長崎原爆都市青年交歓会を開いたことに賛同し、永井博士が自宅のバラを交歓会に贈りました。青年たちがこれを記念して、バラ　を広島旧市庁舎前の庭に植樹しました。広島市役所本庁舎が85 年(同 60 年)6 月に新築完成後、玄関緑地に移植されました。そこで 86 年（同 61 年）８月広島・長崎原爆都市青年交歓会の関係者が記念碑に被爆した旧市庁舎階段に使われていた石を利用し、石碑には永井博士が詠んだ「太田川の水は　逆さに流るとも　原子爆弾　用うべからず」のうたが刻まれています。この石碑を玄関緑地に設置しようとしましたが、新庁舎管理の関係で認められず、適当な場所を探していました。2 年後、88 年（同 63 年）３月に平和大通り緑地に、バラと石碑は設置することができました。

ところが 2013 年（平成 25 年）10 月７日の中国新聞に、「永井博士のバラが日照不足などで弱っている、平和を願って植えられたバラを枯らさないで」との声が市民から出ており、平和大通りを管理する市は、「バラを植えた市民団体を捜している」という記事が掲載され、建立委員会のメンバーがこのことを知りました。同委員会の多くは亡くなっていましたが､当時、中心メンバーの一人、広島市青年連合会元委員長　正本良忠さんが当時の関係者や広島市青年連合会の関係者に呼びかけ、13 年（同 25 年）12 月 27 日に広島・長崎原爆都市青年友好平和のバラ保存委員会を立ち上げました。委員長は正本良忠さんで、私は役員として、委員全員で９名ありましたが、委員全員、熱いものがありました。さっそく、会の目標をたてました。①日陰と人の踏込などのためバラが損傷しているので、植え枡拡張、土壌入れ替え、踏込防止柵設置、日陰樹剪定の実施。②上記の事柄をしていくためには資金がいるので、広く広島市民を中心に 1,000 円募金をすることしました。③改良終了後、１年間の管理を終え、広島市に寄付する。この３つです。

このことにより委員は多くの知り合いに募金を呼びかけ、多くの方々のご寄付やご協力をいただき、14 年（同 26 年）６月 24 日に踏み越し防止柵の設置、２世バラの植樹、15 年（平成 27 年）３月 27 日には、永井博士の説明板を設置いたしました。現在、被爆 70 周年に向けての行事に備えながら、永井博士のバラ保存活動をしているところです。

語り継ぐ責任を感じる、２枚の被爆絵

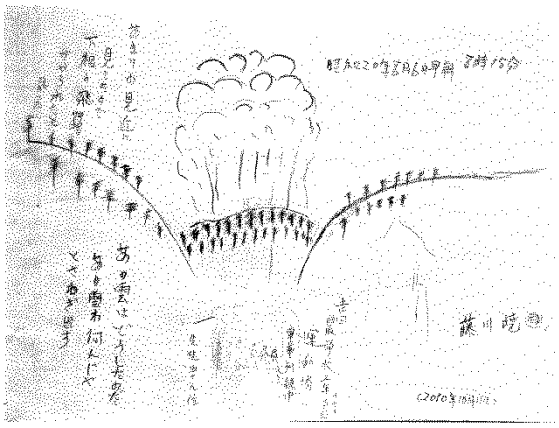
藤川　和康

あまりにもひどいむごたらしさと、怖さは人を寡黙にしてしまうのか。語るということがどんなにつらいものなのか。今にして思うと、父は原爆について、あまりしゃべることなく、人生を終えたように思う。

「あの当時の様子を思い出して、描けるもんがあったら、ちょっとでもええけー、絵にしてほしいんじゃが」。私が頼んだこともあるが、5年近く前、父はやっと画用紙２枚に色鉛筆で70年前の広島の〝あの日〟を、絵にして遺してくれた。１枚目は田舎の学校で見たもの、そして１枚は、広島県庁（旧水主町）に勤めていた姉を捜すため、広島市入りした時の被爆の惨状だ。

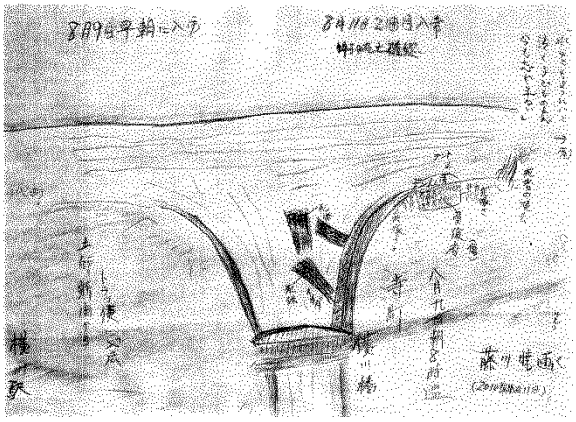
70年前、父は県吉田農学校（安芸高田市）の3年生・17歳だった。農学校は爆心から約40キロの地域にある。あの日、学校の運動場では早朝から軍事訓練が行われていた。50人余りの生徒がいた。

１枚目の絵には、８時15分過ぎ、南の山の合間から原爆投下直後の「きのこ雲」が、黙々と空高く舞い上がり、ざわめきたつ生徒の様子を描いている。「あの雲はどうしたのだ。あの雲は何んじゃーと、さわぎ出す」「あまりの身近に見えたので、下根の飛行場がやられたと思った」と、その時の出来事をメモ書きしている。



２枚目には、原爆投下３日後の朝の模様だ。９日、父はやっと走り始めた救援トラック便に乗せてもらって、県庁勤めの姉を捜しに広島市に向かった。田舎から横川に着いたのは、朝８時過ぎだったという。しかし車はそこでストップ、中心街には入れなかった。

絵には横川橋付近の川に、たくさんの死体を乗せて浮かぶいかだが流れる。河岸に設けられた救援テントに横たわる負傷者。空き地には死者を焼く煙が立ち上る。地獄絵さながらの街が目の前にあった。



絵の角にこんな言葉を書き遺している。「水をちょうだいと泣く子どもの声が、今も忘れられない」。きっと子どもたちは、父に手を差し出しながら消えそうな声で水を求めたに違いない。しかし何もしてやれず、後ろ髪を引かれる思いで水も飲ませることも、助けることもできないまま通り過ぎてしまった。姉のことが心配でたまらなかった。しかし助けられなかった心の〝キズ〟は、その後ずっと忘れることなく引きずっていたのではなかろうか。「子どもたちの声を今も忘れない」と書きとどめた短いひとことに、思いが迫ってくる。姉の消息は２回目の入市・11日に、被爆死が判明。

その後入市被爆の父も、３年前、2012年７月、84歳で亡き人となった。今、２枚の絵は、過去の忌まわしい歴史を伝え、平和であることの大切さを訴える、かけがえのない〝遺言状〟ともなっている。

直接被爆者の高齢化に伴って、当時の体験を語り、描き遺す人が少なくなっている。この２枚の絵は、走り書きで上手とは言えないが、当時の惨状を生々しく物語るものだ。被爆者の体験を語り継ぐのは、今の私であり、次の若い世代の人たちだ。原爆で亡くなった人たちの平和の叫びに応え、核兵器廃絶の世界を築くためにも、一文一句でも伝え語っていきたい。

８．２０広島土砂災害を体験して

曽根田　敏明

◆当時の状況

2014 年 8 月 20 日午前３時頃、自宅裏に自動車、流木激突、里道が濁流。16 年前の６・29 の土砂災害の記憶が甦り、危険と判断して妻と豪雨と暗闇の中、自宅を退出する。緑ヶ丘県住への市道は濁流､避難不可｡H様宅に避難した。直後に２回目の土石流、自宅全壊、自家用車流出、一帯は胸までの泥の海。警察、消防へは電話不通状態。５時頃３回目土石流、悪臭、大音響の土石流が横を通過､民家に激突｡家屋倒壊、悲鳴、地獄絵の状況になった。

◆避難所の体験から

避難所の梅林小学校に、近隣の方々と避難した。着の身着のまま、２日間は着替えと入浴出来なかったが、不足はなかった。泥の海から生還し、不安と疲労、生きていることに不思議さを感じた。

夏季の為、冷房設備がある教室が使用できたのは本当に助かった。持病薬や身の回り品が全てないので不自由さがあった。友人・知人の電話やメールがあり、嬉しかったが状況説明が難しく、もどかしかった。

避難所運営や災害物資も、３日目頃から充実して、安堵感が漂いはじめたが、災害対策本部や関係機関等からの現状、復旧や支援の方向などの説明がなく、高齢者から不安の声が多くあった。

◆６・２９の体験

私は、1999 年勤務先の五日市公民館で６・29 土砂災害を経験した。当日、火曜日休館日、15 時避難所開設指示あり。各館長に出動要請、公民館に避難所を開設した。

この大惨事の事実を記録、継承するため、公民館で災害記録集の作成を指示した。被災者の聞き取り、記録、写真などを収録、貴重な記録保存ができ、被災の継承に繋がったと思う。この６･29が土砂災害防止法設置の契機となった。

◆被災の体験から

私は、区役所に「市民安全課」設置を提案したい。日常業務で防災、減災、避難、警戒区域の設置（市に移管）、災害弱者支援、避難路整備や自主防災会との連携を担う。

更に、鉄道・バス等公共交通事業者、電気ガス・上下水道等の生活インフラ事業者、医師会・救急病院・開業医など医療関係者、災害ボランティア、防災関連団体や社協・町内会等の地域団体などとの連絡会設置も検討してもらいたい。

市民を支える組織として、人材養成が重要である。防災資格専任職員配置や災害対応の研修制度の新設、地域リーダーの養成など、安全安心を基底にしたまちづくりを推進してもらいたいと願う。

◆危機体験から

日頃から、妻が貴重品袋と救急袋の２個のリュックサックを準備していた。６・29 の経験があり、短時間で避難できたことが一命を取り止めた要因と思う。

知人提供の民間アパートに引越。26 年間の思い出が流失、喪失感と不眠。フラッシュバックや寝汗が続く。「生きていれば、孫の笑顔があるよ」と励ます妻の声。もう一度頑張ろうと自分に言い聞かせる。全国からの支援の輪に感謝するこの頃である。

◆今後への思い

今年被爆 70 周年を迎える。世界は広島・長崎の惨事を直視し目を背けてはならない。惨事は大変不幸であるが、そこに学び未来に生きる教訓が隠されている。

私は今度の被災で経験したことを孫達に伝え、生きることの意味を問いかけたいと深く思う。

土砂災害の被害を受けた自宅

注：これらの原稿は、2015 年 6 月中旬までを締め切りとして執筆者に依頼したものです。